

令和 2 年 7 月 14 日現在

機関番号：72644

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02337

研究課題名（和文）近代の牙彫に関する基礎研究 安藤緑山の彩色牙彫を中心に

研究課題名（英文）Research on Ivory Carver Ando Ryokuzan

研究代表者

小林 祐子（KOBAYASHI, YUKO）

公益財団法人三井文庫・文化史研究室・主任学芸員

研究者番号：60399334

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、これまで不明とされてきた安藤緑山の履歴、すなわち生没年、本名、出自、住居の変遷などについて、遺族からの聞き取り調査により明らかにすることができた。また緑山作品の所在調査を通して、2014年には35件であった作品数が、現時点で国内外に109件現存していることがわかった。さらにX線透過撮影、X線CTスキャナ撮影、蛍光X線分析などの光学的調査を実施し、作品の内部構造や各部の接合に使用されている材料、彩色材料など制作技法の解明に迫った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

安藤緑山の遺族から聞き取り調査をおこない、履歴等に関する新知見を得た。また国内外の所蔵機関において作品調査を実施し、作品の熟覧、採寸、および全図・部分図・作者銘・付属品などの詳細な写真撮影をおこなった。さらにX線透過撮影、X線CTスキャナ撮影、蛍光X線分析などの光学的調査を通して、緑山の制作技法の一部を明らかにできた。以上により、従来、美術史的評価の埒外に置かれてきた緑山の牙彫が、近代工芸および近代彫刻のなかに位置付け、再考する価値があるものだという点を提示できた。

研究成果の概要（英文）：This research focuses on Ando Ryokuzan(1885-1959), modern Ivory Carver. By interviews with the family members of Ryokuzan, I have been able to uncover the details of his biography, including the year of his birth and death, his real name, his origins, and the changes in his residence. Through the research of Ryokuzan's works, it was found that there are currently 109 works in existence in Japan and abroad, compared to 35 in 2014. We also performed X-ray transmission imaging, X-ray CT scanner imaging and X-ray fluorescence analysis. As a result, we were able to elucidate the internal structure of the work, the materials used to join the various parts, and the coloring materials.

研究分野：美術史

キーワード：安藤緑山 近代工芸 牙彫 彩色牙彫 象牙彫刻 金田兼次郎 超絶技巧 X線透過分析

1. 研究開始当初の背景

安藤緑山は、近年注目されるようになった、超絶技巧と評される近代工芸を代表する作者のひとりである。緑山の象牙彫刻、いわゆる牙彫は、野菜や果物、動植物などを主題に、象牙に精緻な彫刻を施し、対象に即した入念な着色を加えた、スーパーリアリズムとでも呼ぶべきもので、象牙の素材そのものの白色を生かした同時代の牙彫のなかでも、ひときわ異彩を放っている。しかし、緑山自身の履歴や、制作活動の実態については、ほとんどわかっておらず、その制作技法も、着色法などを一切秘密にし、後継者も持たなかったため、緑山一代で途絶えてしまったとされる。また、緑山に関する研究論文や著書なども皆無であり、研究の蓄積がほとんどないと言っても過言ではない。

そこで研究代表者は「安藤緑山の牙彫 研究序説として」(註1)において、現状で把握している緑山の事跡や展覧会への作品出品履歴、国内外における作品の所在確認をおこなった。その結果、日本国内に35件の作品が確認できた。またその後の情報提供によって、新たに国内に数件、英国・台湾にも数件の作品が所在することも確認された。また研究代表者は、2016年度の1年間、公益財団法人美術工芸振興佐藤基金「美術工芸の調査研究・創作活動に対する助成」を受けて、これら国内外の未調査作品の悉皆調査を開始し、緑山の写実的な牙彫の全容の把握を目指して、制作技法や制作活動の実態の解明に着手した。

しかしながら、緑山の彩色牙彫の着色材料や制作技法を解明するためには、近年著しく発達している文化財の光学的調査、すなわちX線透過撮影、蛍光X線分析、高倍率の顕微鏡による細部観察などをおこなう必要がある。研究代表者はすでに、国立民族学博物館・鶴見大学文学部文化財学科の協力を得て、研究代表者が勤務する三井記念美術館所蔵の「染象牙果菜置物」・「染象牙貝皿置物」の科学的調査を実施し、着色などの制作技法や材料の解明に着手している(註2)。その結果、蛍光X線分析によって、緑山の牙彫の着色にはタングステンやアルミニウムなど金属を主成分とする無機系の着色材料が用いられた可能性が高いことが判明した。これは、正倉院宝物の「紅牙撥鏝尺」など前時代の彩色象牙が、脂肪酸などの有機系の着色材料(染料)で着色されていることと比較しても(註3)、想定外の結果となった。しかし、それらの本格的な解明には、より多くの作品からデータを収集して、総合的な比較検討・分析をおこなわなければならない。

なお緑山の牙彫は、美術館・博物館に所蔵されているものより、個人所蔵家や美術商などが所蔵しているものが多く、研究代表者が2014年に所在確認をおこなった35件のうち、すでに海外へ流失してしまったものが複数点あり、早急に調査をおこなう必要があった。

2. 研究の目的

本研究では、彫刻と工芸というふたつの分野にまたがることにより、研究分野の端境に陥ってしまい、長く研究の埒外に置かれてきた近代の牙彫(象牙彫刻)に焦点をあてる。特に本研究は、その制作技法が次世代に伝えられず、いまだに謎とされている安藤緑山の写実的な彩色牙彫について、光学的調査すなわちX線透過撮影、蛍光X線分析、高倍率の顕微鏡による細部観察などを用いて、解明を試みようとするものである。これによって、後継者を持たず、着色法などを一切秘密にしていたため、一代で途絶えたという緑山の牙彫の着色の材料、制作技術等の特質を明らかにできると考えた。

まず未調査作品の実調査を通じて、真贋の篩い分け、制作技法や制作年代の解明等の美術史的な検証を実施し、光学的調査が必要な作品の選定をおこなう。続いて、選定した作品について、X線透過撮影、蛍光X線分析などの光学的調査を実施し、制作技法や着色材料を明らかにする。

並行して、近代牙彫に関する新聞・雑誌・博覧会記録などの文献資料の調査をおこない、緑山の個性的な牙彫の位置付けを試みることも目標とした。

3. 研究の方法

これまでに所在確認した安藤緑山の牙彫作品のうち、未調査の作品について国内外の所蔵機関や個人所蔵家方などへ出向き、実調査を実施した。当該研究期間内に、京都府・清水三年坂美術館、個人所蔵家(山形県、東京都、埼玉県、京都府、大阪府、福岡県)のほか、台湾・MUSEUM50、英国・大英博物館および個人所蔵家、ロシア・個人所蔵家における調査を実施した。

調査では、彫技や着色方法の目視による観察に加え、ポータブルの100倍マイクロスコープを用いて細部を観察し、デジタルカメラによる画像撮影をおこなった。また、箱書や添状などの付属品を精査し、制作年代や伝来状況などの解明につながるデータも収集した。収集した画像や調査で得られた知見は、データベースソフトを用いて、データベース化した。それらをもとに、真贋の篩い分け、制作技法や制作年代の解明をおこない、光学的調査が必要な作品の選定をした。

本研究の目的のひとつは、制作技法が次世代に伝えられず、いまだ謎とされている安藤緑山の写実的な彩色牙彫について、文化財の光学的調査、すなわち X 線透過撮影、蛍光 X 線分析などを用いて、その制作技法や着色材料を解明することである。2017 年度に、国立民族学博物館教授・日高真吾氏を中心とする研究グループの協力を得て、清水三年坂美術館および個人所蔵家の所蔵品を対象に蛍光 X 線分析調査を実施し、着色材料に関するデータを収集した。

2018 年度は緑山の牙彫の内部構造を解明するため、清水三年坂美術館および個人所蔵家の所蔵品を対象に、X 線 CT 透過撮影および X 線透過撮影を国立民族学博物館において実施した。

並行して、新聞・雑誌の記事、日本美術協会・農商務省工芸展覧会、緑山が所属していた東京彫工会などに関連する文献資料の調査をおこなった。

4. 研究成果

本研究では、安藤緑山の履歴、牙彫作品のモチーフの特質や作者銘の特徴、展覧会出品歴、緑山を支援する委嘱家、受容者、作品の構造や着色法などについて新知見を得ることができた。

緑山の履歴はこれまでほとんど不明であったが、このたびご遺族が見つかり、聞き取り調査が実現した。その結果、本名はこれまで伝えられていた萬蔵(まんぞう)ではなく、和吉(わきち)であることがわかった。さらに雅号の緑山の読みかたは、これまで流布してきた「ろくざん」ではなく「りよくざん」であった。また、生年月日は 1885 年 5 月 16 日、没年月日は 1959 年 5 月 6 日であり、数え年 75 歳で亡くなったことが判明した(註 4)。

緑山は小澤卯之助の次男として浅草に誕生したが、早くに父を亡くし、金工職人の安藤彌太郎の養子となった。緑山は高等小学校卒業後、象牙彫刻を習い、のちに独立したという。ご遺族によれば、弟子はとらずに、ひとりで制作をおこない、息子も家業を継がなかった。そのため緑山の個性的な牙彫とその制作技法は一代で途絶えてしまったのだろう。

さらに第二次世界大戦下の 1944 年頃、株式会社伊勢丹から派遣され、インドネシアのスマトラ島で牙彫の技術指導をしながら制作をおこなっていたことも新たにわかった。

研究代表者が緑山の牙彫の所在調査をおこなったところ、2014 年には日本国内に 35 件、2017 年には国内・国外において 82 件の所在が確認され、現時点では 109 件にのぼっている。モチーフとしては茄子、竹の子などの野菜、柿、みかんなどの果物に加え、明治期以降に食用として一般化したパセリ、トマト、バナナ、パイナップルといった西洋果菜もみられる。また魚介や植物の作例もあり、果菜にかぶと虫、蜂、ねずみなどの昆虫や動物を組み合わせたものもある。

これらの作品に共通するのは、対象を克明に写し取ろうとする、執念とも呼ぶべき仕事ぶりである。形姿、大きさ、色彩、質感、そのすべてにおいて、本物の野菜や果物に肉薄している。手折った枝の不規則にささくれた切り口、病葉や虫食い穴のあいた葉の描写などからも、作者の優れた観察眼と細部にまで神経の行き届いた優れた技術が確認できる。

牙彫は 1877 年頃から大流行をみせるが、それらは「アイボリー」と称される象牙の素材そのものの白色を生かす作品が主流であった。しかし緑山の牙彫の大部分には、対象に即した鮮やかな着色が施されており、これが緑山作品の最大の特徴となっている。また作品の多くは「緑山(緑山乍)」または「萬象(萬象齋)」の彫銘を伴っている。

緑山の牙彫は、1911 年～1928 年に開催された日本美術協会の美術展覧会、東京彫工会の彫刻競技会に出品され、銅牌や褒状などを受賞している。そして、それらの作品はすべて牙彫家で牙彫商としても活躍した金田兼次郎により出品された。金田は緑山に作品を発注し、販売を代行、また展覧会への出品などをおこなう、コーディネーターであったと考えられる。同様に大阪・天王寺に居住した桜井宗齋も緑山のコーディネーターであった。

緑山の牙彫の伝来を調べると、多くの作品が天皇家や宮家などに所蔵されていたことがわかった。これには宮内省御用達製造家を自称した金田兼次郎が関わっていると思われる。緑山の牙彫は、国内のごく限られた富裕層に愛玩されたものであったのではないかと想像される(註 5)。

さらに後継者を持たなかったため、緑山一代で途絶えてしまったという制作技法について、X 線透過撮影、X 線 CT スキャナ撮影、蛍光 X 線分析、高倍率の顕微鏡による細部観察などの光学的調査をおこない解明を試みた。その結果、「松竹梅牙彫置物」「パイナップルにバナナ牙彫置物」のような、複数の部材で形成されたり、複雑な形をした作品には、その接合部にネジやさまざまな太さの金属棒が使われていることを確認した。また着色には、主に金属を主成分とする無機系の着色材料が用いられた可能性が高いことがわかった。

新たに得られた以上の知見を「牙彫師・安藤緑山の研究」(『國華』第 1491 号)としてまとめた(註 6)。

また研究の過程で、緑山の有力なプロデューサーであった牙彫商・金田兼次郎が制作を手がけた大型作品の「牙彫大鷲置物」がスコットランド国立博物館、ロシア国立東洋美術館に所蔵され

ていることが判明したため、現地での調査を実施した。この調査、および所蔵機関から提供された修理報告書などを検討した結果、ネジや金属棒を用いて各部材を接合する手法が、緑山のそれと共通していることが確認された。

さらに安藤緑山以外の作者（中川竜英、中川寿雄、高木芳真など）もわずかではあるが彩色した牙彫を制作していたことが判明した。今後、これらの作品の光学的調査を実施して、緑山の牙彫と比較・検討することで、緑山の制作技法や着色材料の特質をより明確にできるものとする。

<引用文献>

註1 小林祐子「安藤緑山の牙彫 研究序説として」(『超絶技巧！明治工芸の粋』、浅野研究所、2014)(『三井美術文化史論集』第8号、三井記念美術館、2015に再録)

註2 園田直子「安藤緑山作「染象牙果菜置物」の観察結果」、日高真吾「安藤緑山作「染象牙果菜置物」・「染象牙貝し置物」の蛍光X線分析」(『超絶技巧！明治工芸の粋』、浅野研究所、2014)(『三井美術文化史論集』第8号、三井記念美術館、2015に再録)

註3 「正倉院紀要 年次報告」(『正倉院紀要』第35号、2013)

註4 小林祐子[資料紹介]「安藤緑山の履歴に関する新知見 遺族への聞き取り調査を通して」(『三井美術文化史論集』第11号、三井記念美術館、2018年1月)

註5 小林祐子「牙彫師・安藤緑山 作者銘と委嘱家、受容者などの問題について」(『驚異の超絶技巧！明治工芸から現代アートへ』、浅野研究所、2017年9月)

註6 小林祐子「牙彫師・安藤緑山の研究」(『國華』第1491号、國華社、2020年1月)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小林祐子	4. 巻 11
2. 論文標題 [資料紹介]安藤緑山の履歴に関する新知見 遺族への聞き取り調査を通して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 三井美術文化史論集	6. 最初と最後の頁 71-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小林祐子	4. 巻 1491
2. 論文標題 牙彫師・安藤緑山の研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 國華	6. 最初と最後の頁 7-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小林祐子（共著）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 浅野研究所	5. 総ページ数 204
3. 書名 驚異の超絶技巧！明治工芸から現代アートへ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	日高 真吾 (HIDAKA SHINGO)		